

「岐阜県ふるさと教育表彰」実践報告書

県・市・私	岐阜県立	学校名	郡上高等学校
項 目 該当する項目1つ 以上に○を付ける		① 産業界や地域団体等との連携により、地域資源（恵み）を発見・活用する実践	
	○	② 地域を学習のフィールドとし、地域の課題を発見・解決する実践	
		③ グローバルな視点を持ち、地域課題解決型の探究的な学習を推進する実践	
		④ 自治体や、高等教育機関、企業等との協働により地域の魅力を知り、課題を発見・解決する実践	
活動のねらい	地域の課題を発見し、地域の方々とつながり、課題解決に向けて活動する中で、地域への愛着心を育み、地域をつくる一員としての自覚を芽生えさせる。		

〔活動の特色〕

郡上高校では、自治体や地域住民と連携して、地域の課題を発見・解決する活動を積極的に行っている。地域住民との関わりを通して、地域の魅力を再発見するとともに、地域への理解を深め、課題解決に向けて主体的に考え、意見や解決策を提案・発表する能力の育成を目指している。また、地域に足を運び、考えた解決策を実践に移すと、それまで見えなかった新たな課題に直面する。そこで試行錯誤を繰り返しながら、地域の協力を得て提案を具現化する活動を通して、生徒の自己有用感や自己肯定感を育成し、地域への愛着、地域社会の一員としての意識を育むことを目指している。

〔活動の内容〕

1 活動の概要

1年生では、まずは自分ごとの課題に対して、探究のサイクルを実践した。夏休みを利用し、地域における活動に参加し、地域の課題に目を向けた。自治体や企業が社会の課題をどのように解決しているのかを学びながら、自分自身の進路に対する考えを深めた。

2年生では、地域における課題を見つけ、チーム結成をした。課題解決に向けて、チーム毎に実践を進めていった。郡上市イベント「町家オイデナーレ」にて、中間発表として各チームがパネルを展示した。「マイプロジェクトアワード」等の外部コンテストに応募し、探究の活動を他校の生徒と交流し、考えを深める。

2 実践内容（2年次生）

（1）ガチャ de 郡上を盛り上げよう

昨年度の「郡上かるたでガチャ」のチームの活動を引き継いだ。本年度は、より喜んでもらえる製品を自ら考え製作した。特にミニ下駄制作においては、森林環境科学科の協力を得て、よりよい大きさや、印字を考えた。鼻緒の作り方も試作を重ねた。また、「さんぶる工房」の方の協力を得て、食品サンプルも製作した。8月8日、浴衣の日に合わせ、旧庁舎記念館にガチャを設置し、80個完売した。また、11月「町家オイデナーレ」では、八幡町の商店街から寄付して頂いた商品等の引換券を入れ、無料ガチャを設置した。生徒からは、「観光客の方々に郡上オリジナルのものが喜んで頂けた。」「地域の方々が高校生の活動に快く協力して頂けて嬉しかった。」等の声があり、地域の方々への感謝の気持ちとともに郡上の魅力を再発見することができた。

（2）再び灯る 八幡の夜

高齢化により行燈の設置ができなくなった城南地区に焦点を当て、行燈を復活させて郡上おどり会場を彩るための活動を行った。生徒達は、城南地区の住民から行燈づくりの方法を学び、地域の人々の思いを知ることができた。そして、多くの人々に行燈づくりに参加してもらうため、八幡中学校、八幡公民館で行



燈制作のワークショップを開催した。制作した行燈は、8月8日、郡上おどり会場である城南地区に設置した。生徒からは、「夜の町に並べてみたら思った以上に美しく、子ども達が近くで懸命に見てくれる姿が嬉しかった。」という感想があり、地域への愛着を深めることができた。



(3) 郡上の夏は終わらない～郡上おどりを未来へ～パートⅡ

昨年度「観光甲子園2023 SDGs 修学旅行部門」において、郡上おどりをテーマにした修学旅行プランがグランプリを受賞した。その発表に感動し、プランの実現に向けて活動を引き継いだ。7月27日「全国高等学校総合文化祭」国際交流イベントでは、3か国の高校生を迎え郡上おどりを教え、4か国100名の高校生で踊りの輪を作った。その際に、ヨーヨーを作り、外国の高校生に日本の遊びを伝えた。7月30日、子どもの手でつくる子どものための郡上おどりイベント「子どもおどりの夕べ」においても、ヨーヨーコーナーを設置したが、多くの子ども達が列を作って並ぶほどの盛況であった。郡上市は、東京都港区と交流事業を行っており、小学生30人が8月25日に郡上市を訪れた。その事業のサポートに計画の段階から関わった。当日、子ども達を迎え、一緒に昼食をとり、その後、下駄作り・郡上おどりの講習会を実施した。まさに、観光甲子園の旅行プランの一部を実践したものとなった。下駄づくりの講習会をするために、事前に「郡上木履」(下駄屋)で下駄づくりを教えてもらうなど、下駄づくりの練習を重ね、小学生に教えるためのポイントをつかんだ。当日は、東京の子ども達が、自分の作った下駄を履き、喜んで音をならし、郡上おどりを踊る姿があった。また、見送りのシーンでは、バスの中から手を振る子どもたちの笑顔が印象的であった。生徒は、屋形曳きボランティアにも参加し、高齢化が進む中で、郡上おどり継承の課題を実感するとともに、自分たちが幼い頃から慣れ親しんできた郡上おどりを未来につないでいきたいという強い思いにつながっていった。



(4) あゆのパパ

食品ロスの解消と郡上の鮎の美味しさを生かしたメニュー開発を、鮎料理店「みやちか」とコラボする形で行った。商品にならない鮎を「あゆのパパ」と命名し、郡上高校農業科の生産物である「米」「味噌」を使用した。11月30日、「せきてらす」にてイベントを実施し「あゆ梅おにぎり」「あゆ味噌おにぎり」の2個セットを販売した。特に「あゆ味噌おにぎり」は、バーナーであぶっており、味噌の香ばしさと中に入っている鮎の味がマッチしており、好評であった。SDGs視点で郡上の産物を生かすことができ、さらに郡上高校農業科の生産物のPRにつなげることができた。

3 その他の取組

夜の郡上おどり開催に当たって、各町内会が担う会場準備が高齢化に伴って困難な状況になっている。準備の一つである「屋形曳き」のボランティアとして、のべ46名の郡上高校生が参加した。

11月9日～10日は「町家オィデナーレ」というイベントにおいて、2年生が中間発表(パネル展示)を実施し、地域の方々に郡上高校の活動内容を発信した。12月三者懇談中は、校内に展示会場を設けた。

今後は、2月に1年生・2年生全員が校内で発表を行う。さらに、2年生代表の3チームは、郡上市文化センターにて発表を行い、岐阜大学の先生・地域の方々に来ていただく予定である。

〔成果と課題〕

昨年度の活動を引き継ぐチームが結成され、学年を越えたつながりも生まれ、活動の継続・発展という価値を見出すことができた。活動の活性化によって、地域の方々の温かいご協力を得て、感謝とともに生徒達が地域への愛着を深めている。今後、地域の方々との連携をどのように強化していったらよいか、さらに検討していきたい。